



アヤメ

34 編の端書き、**ダビデがアヒメレクの前で狂気の人を装い、追放されたときに(34:1)** という言葉に戸惑います。サムエル記によれば、ダビデがサウル王から逃亡中に、パンを与えてくれたのは祭司アヒメレクです。そして、更に逃げて行った先のガトの王アキシユの下で危険を察知し、ダビデは気が狂ったと見せかけ、追放されたのです。聖書は多数の筆者の手による古文書ですから様々な食い違いが生じたのでしょう。

けれども 34 編は、サウル王から逃げ、飢え、指導者として供の者のためにパンを求め、また、身の危険を避けるため知恵を用いたダビデを彷彿とさせる詩が描かれています。

わたしと共に主をたたえよ。ひとつになって御名をあがめよう。／ わたしは主に求め／主は答えてくださった。脅かすものから常に救い出してください。／主を仰ぎ見る人は光と輝き／辱めに顔を伏せることはない。／この貧しい人が呼び求める声を主は聞き／苦難から常に救ってください。／主の使いはその周りに陣を敷き／主を畏れる人を守り助けてください。(34:4) 詩人は「わたしと共に、ひとつになって」と連帯の喜びをもって歌っています。詩人は自らを貧しい人、辱めを受けた人、けれども、主を仰ぎ求め、主を畏れる人であると告白しています。苦難、苦境の時、主の使いが陣を敷き、守り、助けてくださったと感謝しています。祭司アヒメレクはダビデに協力したことのゆえにサウル王が断罪し、殺されてしまいました。ダビデはそれを知って悲しみましたが、**主に逆らう者は災いに遭えば命を失い／主に従う人を憎む者は罪に定められる。／主はその僕の魂を贖ってください。主を避けどころとする人は／罪に定められることがない(34:22)** と、「主に従う人を憎む者」こそ断罪され、「主の僕」は魂を贖われ、断罪されないと主を賛美しています。「讚美歌21」127「み恵みあふれる」が 34 編の讚美歌で、フィンランド・ルーテル教会の讚美歌集から取り入れられています。作詞はクローン(Julius Krohn 1835-88)、曲はフィンランド伝統旋律とのことです。参照 <https://www.youtube.com/watch?v=yIXT9ivdht0>

35編では詩人ダビデは、神が大楯、盾を取り、槍を構えて、争う者から助け、救ってくださいと祈っています。詩人にとって、神は盾、身を寄せる砦の塔です。7編では、神は **立ち帰らない者に向かっては、剣を鋭くし／弓を引き絞って構え／殺戮の武器を備え／炎の矢を射かけられます(7:13)** と、武具の備えを怠らないばかりか、神の裁きと愛を象徴する「炎の矢」を射る方、17編では **主よ、立ち上がってください。御顔を向けて彼らに迫り、屈服させてください。あなたの剣をもって逆らう者を撃ち／わたしの魂を助け出してください(17:13)** と、「剣」で撃つ方と歌っています。ここで詩人の命を奪おうとする者は同胞です。彼らが病にかかっていたとき／わたしは粗布をまとって断食し、魂を苦しめ／胸の内に祈りを繰り返し／彼らの友、彼らの兄弟となり／母の死を悼む子のように嘆きの衣をまとい／うなだれて行き来したのに／わたしが倒れば彼らは喜び、押し寄せます。わたしに向かって押し寄せ／わたしの知らないことについてわたしを打ち／とめどもなく引き裂きます(35:13) と、善意に悪意を持って答える人々だということです。彼らは詩人に対して災いを謀り、網を張り、落とし穴を掘り、嘲笑し、不法な証人を立てて欺くのです。愛する同胞からの悪意であるがゆえに、詩人は一層苦しみます。このような事態は身近なところで起こっています。彼らが、風に飛ぶもみ殻で、道を暗闇に閉ざし、足を滑らせ、自ら張った網にかかりますようにと思いつつ、「主の使い」に追い払われ、「主の使い」が追い迫り、恥と辱めを衣としますようにと、見ておられる神が彼らに裁きをと、詩人は願います。「讚美歌21」292「勝利をたたえて」が35編の関連讚美歌とされています。6世紀に北イタリアで生まれ、フランスで司祭となったフォルトゥナートの詩をフランスの単旋律聖歌で歌います。参照 <https://www.youtube.com/watch?v=Kpw1i0SdDWY>